様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ２１７７６

研究課題名（和文）臨床的教育社会学アプローチによる学級経営ナラティヴ分析法の開発

研究課題名（英文）Development of a Classroom Management Narrative Analysis Method Using a Clinical Educational Sociology Approach

研究代表者
白松　賢（Shiramatsu, Satoshi）

愛媛大学・教育学研究科・教授

研究者番号：１０２９９３３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、学級のリアリティを探究するため、学級経営ナラティヴ分析法を開発し、小学校を対象とした調査を行い、三点を明らかにした。第一に、学級経営における出来事や語りを言語的資源化し、学級の文化や規範をリアリティとして構成する過程が明らかになった。第二に、学級経営のナラティヴ実践に潜む「不安」と「不確実性」が職員室を基盤に構成されるリスクを明らかにした。第三に、学級経営ナラティヴ実践の記述という調査の教育的可能性である。また大学生を対象とした調査では、教員養成に順応している学生ほど、問題のない学級というナラティヴ・リスクを受容していること等を明らかにし、教員養成や学校現場の課題を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、学級経営について多様な言説が分け持たれている現状において、どのような言説を教員志望学生や教員が採用し、どのようなモデルストーリーや実践を構成しているか、を探究する方法を開発した。学級経営に関する臨床的教育社会学アプローチの研究は少なく、この調査方法を用いて、ナラティヴを探究する質的調査の学術的意義を明らかにした。また学級経営に困難や不安を抱える教員は少なくなく、この問題は教員個人の資質能力に起因するのではなく、多様な言説の混在する職員室によって構造的に構成される問題の可能性を示した。この知見をもとに、教員研修の学級経営講座やワークショップを通じて、研究成果の社会的な還元を行った。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop a classroom management narrative analysis method and a survey was conducted targeting elementary schools. Three main points were clarified. First, the process of constructing the culture and norms of the classroom as reality by verbalizing events and narratives related to classroom management was elucidated. Second, the risks of "anxiety" and "uncertainty" inherent in the narrative practices of classroom management, which are based on the staff room, were revealed. Third, the educational potential of describing classroom management narrative practices was highlighted. Additionally, a consciousness survey targeting university students revealed that those more adaptable to teacher training tended to accept a child-management type of classroom management narrative. The study also examined the issues of teacher training at universities and in school settings.

研究分野：教育社会学

キーワード：学級経営　ナラティヴ　質的調査　リアリティ　臨床的教育社会学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

学級経営は教職の中でも成否が分かりにくい最も困難な仕事の１つとなっている。その結果、様々な学級経営ナラティヴ(学級経営論)の流布につながっている。このナラティヴの多様性は、学校における教師間の違いや混乱を引き起こしている学級経営研究上の課題となっている。

学級経営の先行研究を検討すると、経験主義化、技術主義化、心理主義化の問題がある。2000年代以降、学級経営に関わる著書が多く出版されるようになってきた。それらに通底する点は「学級経営とはどのような営みか」という根源的な存在学的問いよりも、「どうすればうまくいくか」「うまくいっているかどうかをいかに測定するか」という規範学的問いである。この前提には、「うまく学級経営しなければならない」という観念そのものを問い直す省察的視点が不在である。「学級」とは教師にとって非常に不安と不確実性の満ち満ちた場であるにも関わらず、その観念の強固さゆえに教師を苦しめる結果にもつながっている。そこで、教師と児童生徒の関わりの在り方や学級経営そのものを根源的に問い直しながら、よりよい実践の方途を探究する必要性がある。しかし、我が国の学級経営及び学級経営研究において、学級を方向づける教師のナラティヴの探究が不足している現状である。

こうした状況を踏まえると、学級経営に関わる人々を対象にした調査研究が不可欠である。そこで、本研究は、教育社会学領域における臨床的研究(学校をフィールドワークの対象とした研究)の課題を本研究に接合する試みを着想した。近年、学校エスノグラフィーや教師のワーク研究が蓄積されつつあるものの、「教育という営み」そのものの存在学的探究と、「どのようによくすべきか」という規範学的な探究を同時に検討する臨床的研究は依然として少ない。そのため、この領域においても、存在学的探究と規範学的探究を同時に検討する方法は、十分に整理されていない。これらの課題を解決するために、学級経営ナラティヴ分析法の開発に着手した。

２．研究の目的

本研究は、学級経営ナラティヴ分析法を開発し、小学校のフィールドワークを通して、学級経営におけるナラティヴの役割と意義を明らかにすることを目的としている。そのため、 本研究では三つのサブテーマを実施した。第一はライフヒストリー調査、ナラティヴ・インクワイアリー、ドキュメント分析をもとに、臨床的教育社会学アプローチとしての分析枠組みを整理して「学級経営ナラティヴ分析法」を開発改善することであった。第二はデジタルエスノグラフィーで蓄積する学級のデータからナラティヴを抽出し、解釈資源に着目して分析を行い、学級の意味や関係性の相互反映過程を検討した。第三は、学級経営意識調査による混合研究法により、我が国の学級経営におけるナラティヴの役割や特徴を分析した。第三の課題に関して、学級経営に関する学術研究を進展させるため、教職課程を履修している大学生を対象にした学級経営ナラティヴ受容に関する量的調査を行った。第二の課題と第三の調査分析について、学級経営ナラティヴに着目することで、両者の存在論・認識論を架橋する混合研究法を行った。

３．研究の方法

研究の方法は、サブテーマ毎に説明する。

第一のサブテーマについては、①教師を対象としたライフヒストリー研究、②ナラティヴ・インクワイアリー、③生きられた経験、などのナラティヴ理論を用いた教育研究などを対象とした文献調査である。第二のサブテーマについては、学級経営に関する質的調査の分析である。本調査では、デジタルビデオカメラの記録を利用したデジタルエスノグラフィー、教師へのインタビュー、学級日誌などのドキュメント資料を収集し、分析を行った。

分析の対象としたデータであるが、次の三つに大別される。

①2015 年から 2018 年までのデジタルエスノグラフィー・データ（ドキュメントや調査協力者の分析ドキュメントなどを含む）の再分析

②2019 年度から 2022 年度までに蓄積されたデジタルエスノグラフィー・データ（６学級）

③教師のインタビュー・データ（４名）（ベテラン層３名、中堅層１名、実習生４名）

第三のサブテーマについては、教職課程を履修している大学生を対象とした学級経営意識調査は、2021 年 6 月から 7 月にかけて実施した Google フォームを用いたウェブ調査である。4 年制大学（国立 2 校、私立 4 校）での調査を実施し、データクリーニングを行った結果、有効回答数は 777 名となった。

４．研究成果

（１）学級経営ナラティヴ分析法の開発

本研究では「学級経営ナラティヴ分析法」と呼ぶ質的研究法の開発を行った。この手法は、解釈学的アプローチの中でもナラティヴ理論に基づくフィールドワークを基盤としている。分析枠組みは、①教師を対象としたライフヒストリー研究、②学級経営実践のナラティヴ・インクワイアリー、③学級についてのドキュメント分析(エピソード記述法、クラスルームヒストリー法、“生きられた経験”の分析など)の三つで構成される。現段階では、解釈学的アプローチに基づ

き、教室における学級経営実践を対象とした質的調査を行い、学級を方向づける解釈資源(言語、物語、象徴)に着目して、学級におけるナラティヴの相互反映過程を検討するエスノグラフィーとして、図１の研究枠組みと方法を構成した。具体的な調査方法としては、①学級経営に関わる教師の意識や想いをライフヒストリー調査で収集・分析し、個々の教師の学級経営観を構成する言語資源と物語資源を明らかにする。②「朝の時間」「学級活動」など、学級について教師の考えや想いを語る場を中心にエスのグラフィーを行い、教師や児童の用いる学級解釈資源(象徴資源等)の相互反映過程をナラティヴ・インクワイアリーの方法論を基盤として解釈=記述する。③フィールドワーク外の事例や語りについては教師へのインタビューや教師による記述物（学級通信、学級日誌等）のドキュメント分析を用いて検討する。特に、学級における文化創造の場面や問題解決（児童間のトラブルや葛藤）の場面は、ナラティヴの相互浸透過程を分析する上で重要となる。

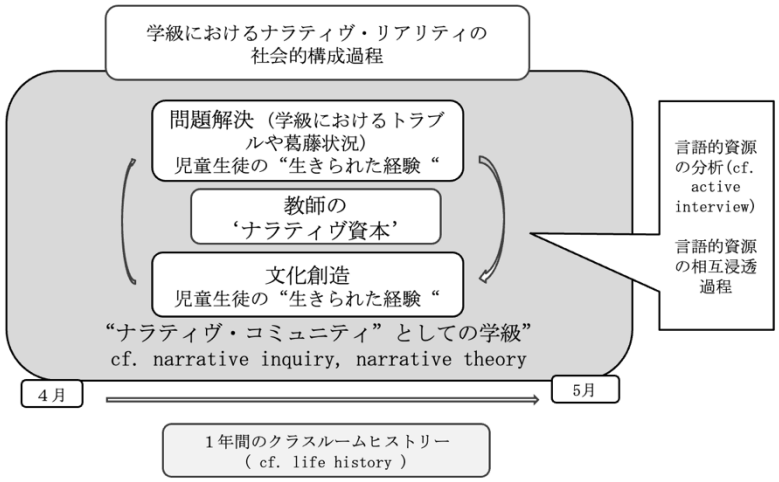

図１　学級経営ナラティヴ分析法の研究枠組み

すなわち、「学級経営ナラティヴ分析法」は、教育現場で生成・維持・変容する学級経営の「経験的リアリティ」を解釈＝記述する方法であり、この探究により、学級経営の「実践知」の構成過程を明らかにすることができると考えられる。

（２）学級経営ナラティヴの分析

学級経営ナラティヴ分析の結果を要約すると、主に次の３点となる。

第一に、ナラティヴの相互浸透過程を分析した結果、年間の学級における出来事を言語的資源として、学級の規範や文化のリアリティが構成されている過程を明らかにした。例えば、次のドキュメントは、学級で互いに注意し合うことを成長のための機会と捉え、「注意」を「感謝」に置き換えるナラティヴの相互浸透過程の一部である。終わりの会で、児童に注意した際に、「注意されることへの感謝」の大切さを強く伝えている場面である。

「じゃあ、姿勢を正してください。話を聞いてないよ。姿勢を正してくださいって言ったら正しくしないといけないよ、分かってくれる？（中略）。注意されたけど、注意した人に感謝しないといけないよ。」(20XY 年 10 月 27 日フィールドノーツ)

この教師のナラティヴ実践は、児童の相互作用を通して生まれてきた問題解決の経験を利用している。この教師は、他の児童から注意された時に、「注意してくれてありがとう」とあたたかく感謝を伝えた児童を資源（モデル）として、互いに行う「注意」を、「感謝」「アドバイス」というナラティヴに接合してきた。この結果、児童の間の注意という行為に潜むリスク（攻撃的な人間関係の形成）を低減し、互いの成長を促す関係性を構築するためのナラティヴとして学級に浸透させていっていた。このような問題解決や文化創造に関する相互作用プロセスが、年間の教師と児童とのやりとりや児童間のやりとりを通じて、学級の文化や規範をナラティヴ・リアリティとして構成している。本調査は、このようなプロセスを明らかにした。

第二に、この相互作用浸透プロセスは、「崖の上を歩く」と表現される「教師の不安」を土台としている問題を内包している。先の事例の学級経営ナラティヴ実践は、「大きな問題が生じていない」という学級の非問題状況を参照枠として、その成否が解釈される再帰的性質を有している。この実践は、教師と児童の関係性において大きな人間関係上のトラブルがなく、1 年間を通じた信頼関係が構築されていったという結果では成功的に評価されうるが、他の教師にとっては、教師の権力による刷り込み（抑え込み)、という批判にもつながりかねない。すなわち、このような相互作用実践には、プラスにもマイナスにも解釈しうる両義的性質が、学級経営の評価に内在していることになる。そのため、一度、学級で問題が生じると、それまでの実践は、全て負の評価を与えられるリスクがある。これらの状況を通じて、特に、職員室内の権力構造は、この不安定さに影響を及ぼしていた。「学級経営がうまくいく」という状況は解釈問題であり、他者の評価により、成否が決定される側面がある。そのため、子どもとの相互作用を丁寧に行ったとしても、不登校や児童間トラブルなどの発生を「負の結果」として評価（ラベリング）する管理職や教員の語りが、教師と児童の創造的なナラティヴ実践の弊害となっている問題も明らかになった。

第三に、大学生や大学院生の学級経営ナラティヴ実践の記述という調査実践の教育的可能性

である。大学生や大学院生による協力者の調査では、質的調査法の認識論や方法論に基づいて、教師の生活や仕事、そして実践を丹念に解釈＝記述することを行った。この調査＝記述を通じて、調査者である大学院生と被調査者である教員との理論や実践に関する知識の透過性を明らかにできることがわかった。すなわち、調査者である大学生や大学院生が学校現場の教師の学級経営のプロセスを言語に着目して記述することを通して、自己を主体化したり脱主体化したりして、学級経営実践を描くことになる。そのため、観察やインタビュー、記述といったフィールドワークに内在する言語的資源、カテゴリー、言い回し、フォークロアに着目することで、自己の実践に関する考えや説明において、「外部の考えや言説」が自己理解や他者理解を形作る「反映」を丁寧に分析したり、解釈したりしうることができる。このことにより、単なる自己告発としての再帰性ではなく、単なる実践報告でもなく、構成され生成され続ける「実践知」の内容に迫る方法としての可能性が示される。

（3）学級経営ナラティヴ受容に関する意識調査結果

この調査の分析結果は、以下の３点となる。

第一に、大学生の学級経営観、具体的には大学生が考える望ましい学級像の分析結果である。因子分析（最尤法、プロマックス回転）の結果、最終的に 3 つの因子を抽出した。第 1 因子は「生活共同体的学級」で、「チャレンジ」「失敗の受容」「協力」「楽しさ」「感動」など以前から希求されてきた学級における子どものイメージに関わる項目によって構成されていた。第 2 因子は「包摂重視学級」で、「自分の特性に応じて立ち歩きや、教室の外に出ることが許される学級」などの項目によって構成された因子である。さまざまな子どもたちを包摂することを重視する学級像に関する因子として解釈される。第 3 因子は「トラブルゼロ学級」で、「教師–子ども」「子ども–子ども」関係において、トラブルがない学級像に関する因子として解釈できる。分析結果より、多くの大学生は旧来型の生活共同体的な学級を望ましいと考える一方、これから求められる包摂を重視する学級を望ましいと考える大学生は少なかったことが分かった。学生生活や教職の志向性との関連について分析を行った結果、生活共同体的な学級イメージを肯定する学生は、大学の授業への期待が高かった。さらに生活共同体的な学級イメージを肯定する学生は、大学での学習や多様な学外経験が教職につく上で重要と考えていた。他方、包摂重視の学級イメージを肯定する学生は、ゲームやネット（サイバー空間）、趣味の経験が教職につく上で重要と考えていた。

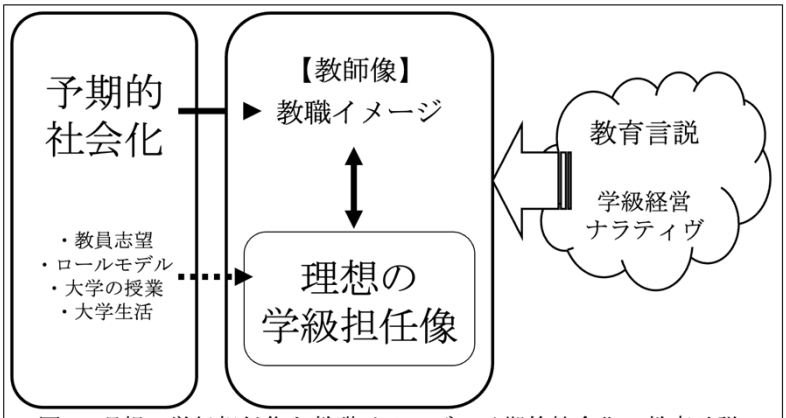

図2　理想の学級担任像と教職イメージ・予期的社会化・教育言説（学級経営ナラティヴ）の関連

第二に、大学生が考える望ましい教師像（学級担任像）の検討の結果である。望ましい学級担任像について因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った結果、次の 3 つの因子が抽出された。第 1 因子は「教職専門性をもつ学級担任」で、「授業が上手な先生」「コミュニケーション能力が高い先生」など授業指導力や児童生徒とのコミュニケーション能力など教職の専門性に関わる項目によって構成されていた。第 2 因子は、「親しみのある学級担任」で、「やさしい先生」「面白い先生」など子どもから見て親しみを感じる教師像に関する項目によって構成されていた。第 3 因子は、「子どもの主体性を重視する学級担任」で、「子どもたちだけで解決」「子ども自ら課題に気付いて取り組むまでゆっくり待つ」といった子ども自らの行動や意思を尊重する教師像に関する項目によって構成されていた。基礎統計量の結果を見たとき、「教職専門性をもつ学級担任」を中心にそれを望ましいとして肯定する大学生の割合が極端に多かった。この結果は、何を望ましいと考えるか、学級担任観の多様性が喪失されていることを示唆させる重要である。続いて望ましい学級担任像と教職の予期的社会化の関連を行った。その結果、望ましい学級担任像において予期的社会化の関連は限定的であった。また、望ましい学級担任像と教育言説（学級経営ナラティヴ）の関連を見るために、教職に関するイメージを取り上げ、望ましい学級担任像との関連について分析を行った。教職専門性をもつ教師や親しみのある学級担任を望ましいと考える者は、教職はやりがいのある仕事というイメージをもつ傾向にあることがわかった。ただし同時に、教職専門性をもつ教師や親しみのある学級担任が望ましいと考える者は、教職は負担が大きな仕事というイメージをもつ傾向にあった。さらに分析結果より、「子どもの主体性を重視する学級担任」という子ども自らの行動や意思が尊重される学級担任像が望ましい

とされないことから、「学級の中心は子どもではなく教師」と捉える意識があることが示唆された。図 2 は理想の学級担任像と教職イメージ・予期的社会化・教育言説（学級経営ナラティヴ）の関連を図示したものである。

第三に、望ましい学級像と学級担任像の関連を検討した結果、生活共同体的学級イメージとトラブルゼロ学級イメージはすべての望ましい学級担任像と正の相関あった。さらに包摂重視学級イメージは、子どもの主体性を重視する学級担任と正の相関があった。こうした分析結果から、硬直化された学級像と学級担任像が共振していることが示唆された。すなわち、これは、大学の教員養成に適応的な学生ほど、問題のない学級というナラティヴ・リスクを抱え、児童生徒を管理する学級経営イメージを有する、という問題である。

一方、包摂重視の学級イメージは子どもの主体性重視の学級担任イメージと関連があった。ただし、そうした学級像や学級担任像は大学外での経験志向に関連があった。他方、大学の授業に対する不満を有していた。つまり、21 世紀型モデルの学級経営に関わる「包摂」「主体性」が、教員養成カリキュラムに適応しているであろう大学生において、支持されていない結果となっていた。換言すれば、教員養成において学級経営における包摂というテーマが十分取り扱われておらず、教員養成における学習経験が旧来型の学級像を強化させている可能性が示唆された。これからの学級経営にむけた大学の教員養成の課題は、大学においてこれまでの学級像を省察する機会を増加することと同時に、包摂を重視する学級経営に関する学習を充実させることである。

これら本研究の知見は、学級経営に関する教員研修やワークショップを通じて、教員個人の問題に還元せず、職員室の構造的な問題を検討するように促し、社会的な還元を行っている。

（4）結語と議論

本研究の結果は、「学級経営の成功」を想定するナラティヴの網の目から、私たちがいかに抜け出せるか、ということの重要性を提起する。そのためには、学級経営の不確実性と向き合う教師の仕事を記述し続けると同時に、学校内部に、教師個々の学級経営をエンパワメントする支援的環境を構築し続ける試みと、これを記述するナラティヴ的探究が求められる。

成果主義やエビデンス希求の強くなる現在、本研究で示したように、質的研究の認識論や方法論を徹底して調査することは、重要なエビデンスにも、教育方法にもなりうる。と同時に、ナラティヴがいかなる受容や消費をされているか、量的調査につなげることで、大学における教員養成や教員研修の課題も明らかにすることができる。

ただし、どこまでを応用科学として展開するかという認識論上の線引きや混合研究法としての方法論は十分な検討ができていない。本調査の取り組みは端緒についたばかりであり、今後の蓄積とともに、この方法を批判的に検討したり、可能性を明らかにしたり、さらに探究をする必要がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 伊勢本大・白松賢・梅田崇広・藤村晃成	４．巻 112
２．論文標題 教師の生きられた経験と専門職としての資本：コロナ感染拡大期の学校における意思決定に着目して	５．発行年 2023年
３．雑誌名 教育社会学研究	６．最初と最後の頁 31-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 長谷川祐介・白松賢	４．巻 44（2）
２．論文標題 大学生が考える望ましい学級とは？　－これからの学級経営にむけた教員養成の課題－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 大分大学教育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 209-220
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.51073/17111	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 長谷川祐介・白松賢	４．巻 40
２．論文標題 望ましい学級担任像に関する大学生の意識　－ 学級担任の予期的社会化の限界と教育言説の呪縛－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 大分大学教育学部附属教育実践総合センター紀要	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.51073/17198	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 白松賢	４．巻 1442
２．論文標題 学級経営のリフレーミングと語りを紡ぐ力	５．発行年 2022年
３．雑誌名 教育研究（一般社団法人 初等教育研究会）	６．最初と最後の頁 24-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 白松　賢	4．巻 67
2．論文標題 学級経営の不確実性に向き合う　ーナラティヴ・アプローチによる省察に向けてー	5．発行年 2022年
3．雑誌名 中国四国教育学会編『教育学研究紀要』(CD-ROM)	6．最初と最後の頁 128-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 白松　賢	4．巻 1007
2．論文標題 学級経営充実の視点	5．発行年 2021年
3．雑誌名 初等教育資料	6．最初と最後の頁 6-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 白松　賢	4．巻 1430
2．論文標題 ストーリーを紡ぐ学級経営	5．発行年 2021年
3．雑誌名 初等教育研究会編『教育研究』	6．最初と最後の頁 24-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 馬越悠，白松賢	4．巻 67
2．論文標題 自己有用感を高める生徒指導体制の構築 ーアセスメントを活用した実践改善に向けてー	5．発行年 2022年
3．雑誌名 中国四国教育学会編『教育学研究紀要』(CD-ROM)	6．最初と最後の頁 116-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 丸山美紀，白松賢	4．巻 67
2．論文標題 自己効力感を育む学級活動(3)の実践 ー児童のピア・コーチングに着目してー	5．発行年 2022年
3．雑誌名 中国四国教育学会編『教育学研究紀要』(CD-ROM)	6．最初と最後の頁 110-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 白松 賢	4．巻 1602
2．論文標題 21世紀型学級経営を展望する	5．発行年 2020年
3．雑誌名 信濃教育	6．最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 白松　賢	4．巻 1430
2．論文標題 ストーリーを紡ぐ学級経営	5．発行年 2021年
3．雑誌名 教育研究	6．最初と最後の頁 24－27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡田聖，白松賢	4．巻 ６６
2．論文標題 学級経営ナラティヴ分析法の検討 ー教師の語りと児童の活動の関わりに着目してー	5．発行年 2021年
3．雑誌名 中国四国教育学会編『教育学研究紀要』	6．最初と最後の頁 72-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 白松賢，古泉啓悟，岡田聖	４．巻 31(4)
２．論文標題 質的調査法を用いた臨床的教育方法の探究　ー試行的実践としての学級経営フィールドワークー	５．発行年 2019年
３．雑誌名 松山大学論集	６．最初と最後の頁 19-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　5件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Shiramatsu Satoshi
２．発表標題 Creating a Sustainable Work Environment for Japanese Teachers: Focusing on the Ambivalence of Evaluating Teacher Development and Practices
３．学会等名 the 28th Taiwan Forum on Sociology of Education（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 長谷川祐介・白松賢
２．発表標題 学生が描く学級担任像　―学級経営意識調査の分析を通して―
３．学会等名 日本子ども社会学会第28回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 白松賢，梅田崇広
２．発表標題 小学校の学級経営に関するナラティヴ分析 ―ナラティヴ・コミュニティの構成過程に着目して―
３．学会等名 日本教育社会学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 SHIRAMATSU Satoshi
２．発表標題 Narrative Analysis of Classroom Management: Exploring the Possibilities for Educational Practice as A Clinical Educational Sociology
３．学会等名 The 27th Taiwan Forum on Taiwan Association for Sociology of Education (TASE) : National Taiwan Normal University（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 白松　賢
２．発表標題 学級経営の不確実性に向き合う －ナラティヴ・アプローチによる省察に向けて－
３．学会等名 中国四国教育学会第73回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 馬越悠，白松賢
２．発表標題 自己有用感を高める生徒指導体制の構築 －アセスメントを活用した実践改善に向けて－
３．学会等名 中国四国教育学会第73回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 丸山美紀，白松賢
２．発表標題 自己効力感を育む学級活動（3）の実践 －児童のピア・コーチングに着目して－
３．学会等名 中国四国教育学会第73回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 長谷川祐介,白松賢
２．発表標題 大学生の学級経営観の諸相
３．学会等名 日本学級経営学会第４回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 岡田聖，白松賢
２．発表標題 学級経営ナラティヴ分析法の検討 ー教師の語りと児童の活動の関わりに着目してー
３．学会等名 中国四国教育学会第72回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 白松賢
２．発表標題 未来につながる特別活動 ー共に生きる「社会の形成者」をめざしてー（シンポジウム）
３．学会等名 日本特別活動学会第29回（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 増田有紗，白松賢
２．発表標題 個と学級をつなぐナラティブの検討 ー学級経営ナラティブ分析法を活用してー
３．学会等名 日本特別活動学会第29回
４．発表年 2020年

１．発表者名 白松 賢
２．発表標題 子どもと教師をエンパワメント ー21世紀型学級経営への転換を目指してー
３．学会等名 日本学級経営学会第３回研究大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 白松　賢
２．発表標題 学級経営のこれまでとこれから(鼎談)
３．学会等名 日本学級経営学会第３回研究大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 白松　賢
２．発表標題 特別活動における教材研究の推進(1) -学級活動(2)「生活態度の形成」に着目して-
３．学会等名 日本特別活動学会第28回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	長谷川　祐介 (Hasegawa Yusuke) (30469324)	大分大学・教育学部・教授 (17501)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	梅田　崇広 (Umeda Takahiro)	愛媛大学・教育学部・准教授 (16301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関